

相模原市内の盃状穴調査【1】新戸～磯部を訪ねて

—R6～7年調査隊活動報告—

領家 玲美*・ぶらり！相模原盃状穴調査隊

* 相模原市立博物館

はじめに

「盃状穴（はいじょうけつ）」とは、旧街道沿いの神社や寺にある手水鉢や灯籠基壇、石橋などの石造物等に人為的に穿たれた直径約7～8cm程の丸い穴のことを総称している。民俗学の学術用語として昭和初期から呼称されているが、誰がなんのために穿ったのかということが判明していない謎の穴である。当初は原始～古代の穿穴に対して付けられた経緯がありそれを「第一義的盃状穴」と呼んでいるが、この調査隊での調査の対象は中・近世以降に残された痕跡である「二義的盃状穴」である。この穴を穿つ行為は明治・大正時代まで行われていたようだが、その行為を行ったという人物を聞かないという不思議な穴である。盃状穴のこれまでの研究経緯や調査隊の結成経緯などについては、博物館研究報告第33集に報告した通りである。今回は令和6年度11月～3月の実地調査成果と令和7年12月までの調査隊活動記録を報告する。

1. 大山道を歩く

ぶらり！相模原盃状穴調査隊の母体である文化財課に所属する文化財調査普及員古道班のR6年のテーマが「大山道を歩く」ということから、まずはこの街道付近の神社や石造物の調査を行った。旧相模原市内での大山道のルートは以下のとおり、主に3つあると言われている。

①府中通り大山道

府中⇒小野路⇒木曾⇒古淵⇒麻溝⇒勝坂⇒磯部の渡し⇒猿ヶ島へ渡り、大山へ向かう

②八王子通り大山道（ルート1）

八王子⇒橋本⇒橋本の棒杭⇒上溝⇒田尻⇒当麻の渡しへ

③八王子通り大山道（ルート2）

八王子⇒橋本⇒橋本の棒杭⇒塚場⇒下九沢⇒四ッ谷⇒久所の渡し（『さがみはらの地名』ほか）

今回は府中から小野路、古淵を通り磯部の渡しへと抜ける府中通り大山道を調査ルートとして選択した。

2. 盃状穴調査 府中通り大山道編

（1）新磯公民館区①～新戸を中心に～

令和6年11月5日（火）午前10時にJR相模線相武台下駅にメンバー6人が集合し調査を開始した。主に関東・中部エリアを調査する組織「盃状穴調査ネットワーク」のメンバーから盃状穴についての基礎的事項（5W）を把握しよう、民俗の学芸員からあまり調査範囲を最初から狭めない方が良いとの言葉を胸に、大山道に面してはいるが、周辺の調査も含めることとして調査に当たった。調査を行う石造物は、事前に各公民館区を拠点に調査を進めた『旧相模原地域21年度石造物・景観調査報告書』の調査票から目星をつけ（相模原市総務課市史編さん室2010）。

相武台駅から東側すぐに所在する長松寺①（以下、数字は図1内の位置を示す）の地藏菩薩は、庭に点々と基壇上に安置されていたものの、盃状穴のある石造物はなかった。向かいの白山姫神社②でも古い灯籠の一部が残っていたが穴は見当たらず、大山を正面に臨む道へと続く明治14年の道祖神③は、基壇がコンクリートで一部造成されており、残存部では見当たらなかった（写真1）。その道を相模川の方へ下り、正面に大山が視界いっぱい広がってきたところに3本の道が交差する辻があり（写真2）、そこに植えられた松の木の下に新戸河原の道祖神④が佇んでいた。その基壇を見ると無数の盃状穴が空いているではないか。ついに相模原における第1盃状穴を発見した（写真2～4）。その道祖神の周りはさらに4隅を他の石造物の一部のようなもので囲われ、全体はコンクリートで作られた土台に埋め込まれていた。この配置が、近年の道路拡張の際にまとめてこの場所に移された際にこのような形にしたのか、当時からこうであったのかは定かでない。元位置から多少ずれているとは思いますが、字もだいたい読めないほど風化しているものの、盃状穴のある基壇が今日まで残存したことは奇跡的に感じた。この場所、この立地にあったことを肌で覚え、今後の調査に活かしていきたい。

辻を進み、⑤の庚申塔等石造物群や⑥の稻荷神社、⑦の常福寺を見て回ったが、盃状穴は確認できなかった。最後に、磯部八幡宮⑧（以下、図2内）を見て回り、八幡宮内の石造物にはないことを確認した。歩道橋でつながる八幡宮の参道まで向かい、結界となる石橋も確認したが周囲を概ねコンクリートで囲われており、残存部

には盃状穴を確認できなかった。第1回目の調査で、調査隊が盃状穴のある石造物を発見することが出来たのは大きな成果となり、士気が高まる調査となった。

(2) 新磯公民館区②～磯部を中心に～

令和6年12月3日(火)午前10時に勝坂遺跡公園駐車場⑨に集合し、県道46号線沿いの庚申塔⑩から調査を行った。しかし、盃状穴はなく、前回の磯部八幡宮で未確認の石造物を、文化財普及員南部班の協力を得て、場所を特定し確認したが、盃状穴は見つからなかった。今回は大山道沿いの調査であったので、八幡宮になかったことは意外であった。八幡宮前の大山道沿いにある八幡坂下の地神塔等が集められた石造物群⑪の地蔵菩薩の蓮弁に盃状穴が6個空けられていた。続けて大山道を南下し、磯部の渡しへ向かう北からの道とぶつかる辻に、道祖神・大山不動・道標⑫が並んでいる(写真5)。その道祖神の頂部中央に1個の盃状穴が空けられていた。その場所は古道として古くから人の往来に使われていたところであり、当時の人の息遣いが感じられるような雰囲気があった。ここからは盃状穴が次々と発見されてゆく。⑬は磯部の渡しに向かう曲がり角で大山道標が置かれ、その向かいの広場に集まる石造物群⑭に不明石であるが、盃状穴が複数あいた石が、お不動さんと地蔵菩薩の前に置かれていた。そこから少し南下したところにある御嶽神社⑮は大山参りの途中で立ち寄り、参拝したであろう神社であったと想定できるが、参道の鳥居の手前脇に道祖神と3基の庚申塔があった(写真6)。弘化3(1846)年の道祖神の頂部には4つの穴が空けられていた。参拝前、あるいは参拝後にここで穴を穿つ行為が頻繁に行われたのだろうか。そんなことが想像できるような穴の空き具合であった。また、明治5年の庚申塔の頂部には各々1つの穴が空いていた。

磯部の渡しがあった場所⑯として地名標柱が立っている磯部頭首工公園にて昼食をとった。目前に広がる相模川を渡った人たちが目に浮かぶような気持ちになった。その公園内に、水神⑰が供えてあったがこちらは新しいものであった。磯部の渡しに大山道でなく、御嶽神社経由で南から来るだろうと思われるルート沿いの十字路にお不動さんがある。その向かいの角に、馬頭観音と庚申塔が多数群をなして設置されている⑱(写真7)。後世にひとまとめにされたのだろうが、この庚申塔12基のうち8基の頂部に穴が空けられていた。馬頭観音はこれまでの調査では、あまり盃状穴があけられていることはなかったが、ここでは3基のうち1基にみられた。記録を撮るために、しばらく居るとその間もひっきりなしに車が往来した。相模川支流の四ツ谷橋を渡ったたもとの道祖

神⑲には穴は空いていなかったが、みんなに触られてつるつるの表面であった。

能徳禅寺⑳の地蔵菩薩は庭に、雰囲気良く設置されていたが、盃状穴が空いているものはなかった。予定していた調査を終えたので、勝坂遺跡の方へ歩いてみると、新磯小学校入口の信号手前の石垣上に御嶽神社や庚申塔石造物群にあったものと同じタイプの標柱状の庚申塔がずらりと並んでいるところがあった。高い位置にあり、頂部を覗き見ることはできなかったが、おそらく盃状穴があるのではないかと想定される。新磯小学校入口信号を渡ると、そのたもとに調査隊メンバーが過去に文化財として普及員通信に紹介した大形庚申塔の青面金剛像(前号掲載写真12、文化財調査・普及員通信紙さねさし38号)があったので、一応見てみよう調査したところ、基壇に盃状穴が6個確認できた(写真8)。当時紹介した時は「盃状穴」を知らなかったとはいえ、まったく気が付かなかつたと驚嘆し、見ようと思わなければ見えないもののだということを改めて実感した調査であった。2回目の調査では盃状穴が多数確認され、新磯地区でこの風習が根付いていた痕跡を窺い知ることが出来た(表1)。また、武井橋第二橋脇にある時宗六字名号碑基壇に2個の盃状穴がみられることを調査隊メンバーが後日確認した。庚申塔は、明治5年に作られたものが多数を占め、調査隊が調べたところ、勝坂集落の勝源寺において青面金剛像を養蚕の神仏として祀る大きな祭りがその年にあったことと関係していそうである。今後の石造物調査の成果の蓄積を待ちたい。

3. 秋まつり参加と令和7年度の調査ルート概要

相模原市立博物館は令和7年11月20日で開館30周年を迎えた。特別展示室ではポケモン天文台の展示が行われていたため、このことにちなんだ展示は令和8年1月以降に予定されていた。しかし、30周年の日になにもしないのは、これまでの博物館の歴史上なかったことなので、記念イベントとして11月22日(土)～24日(月・祝)の3日間に博物館お誕生日記念「博物館の秋まつり」を地下の大会議室で行うことになった。

イベント内容は博物館で活動している市民ボランティアグループを中心に、日頃の活動や各分野の面白さを来館者のみなさまが体験できるワークショップを縁日風に展開するという方針であった。ちょうど盃状穴調査を開始して1年が経ち、成果があがってきていたので、そろそろ1度発表できると良いなという思いもあったところで良い機会であった。調査隊で話し合って参加を決め、準備を開始した(写真9～13)。盃状穴のある石造物を白地図に落として展示をすることをメインテーマにした

が、写真では伝わりにくい。そこで盃状穴を視覚的に補えるための模型を作成することにした。また、ワークショップとして実際に叩いて穴を空けてみる体験を考え、メンバーが自宅から持ち寄ってくれたレンガを石で叩くコーナーを設けた（写真 14）。叩くだけの体験だが子どもたちに人気のコーナーとなり、「ずっと叩いていても飽きない!」という声が聞こえた。煉瓦は石造物に使われる七沢石などに比べ柔らかいので、秋祭りが終わるころにはピンポン玉くらいの穴ができた。古来作られた穴が、その後子どもたちの遊び場として使われたという話も現実にあっただろうなど夢中になる様子を見て思った。

さらに、展示を見てくれた方に「この穴なんだろう?」というアンケートを実施した。約 50 人中、9 割の方が「(意識して) 見たことがない」であったが、1 割の方は見たことがあるけれど、なんだか分からないという結果であった。なにかを備えたのか、丸いものを置いたのか? と思ったことを付箋に書いてもらい、いままで気にしたことがなかったので、見てみたいと思うという気持ちを持って帰ってもらえたことが大きな収穫であった。

展示を見た市民ボランティアの方の何名かはこの調査に関心を寄せてくれ、なかには後日、お住いの近所やハイキングに行った先のそれらしき穴の情報をくんだり、石造物研究の輪が広がった。調査範囲が広く、細かいところまで見切れないところは地元の力を頼りにしたい。そのためには、今回のような機会を捉えて情報発信していくことが大切であると実感した。学びの収穫祭も積極的に参加し、情報発信の場として活用していきたい。

令和 7 年の調査活動の概要を報告すると、4 月に②八王子通り大山道（ルート 1）の橋本～橋本の棒杭までの範囲で橋本と東橋本を含めて調査を行った。橋本周辺は開発が進み、大山街道沿いも街道の名残はほぼない状態であったが、お寺を中心に見て回った。当エリアでは、盃状穴をみることは残念ながらほぼなかった。盃状穴はどこにあって、どこにないのかを調べることも重要な手掛かりとなる。なかったことも大事な調査成果である。5 月は今後の調査ルートを決める打ち合わせを行い、7 月からは③八王子通り大山道（ルート 2）に沿って、橋本から塚場、下九沢へと向かい（写真 15）、8・9 月は猛暑のため夏休み、10 月から調査を再開し、7 月のルートを南下して四ッ谷、久所の渡しへ向かうまでの田名エ

リアを調査した。田名は最初の調査地点である石神社（いしがみしゃ）から複数基の石造物に盃状穴が発見された（写真 16）。11 月は先述の秋まつり準備で 4 回作業を行い、12 月に水郷田名にて現地調査を行った。1 月は正月休みで 2 月は収穫祭と今後の調査ルートを確認し、3 月から八王子通り大山道（ルート 1）沿いの上溝から調査を行う予定である。上溝は古い町並みが残り、上溝まつりなど現在も多くの人が集まる地域である。石造物が多くあるエリアであり、盃状穴の発見が期待される。

4. おわりに

令和 6 年から新磯野・磯部地区を巡見し、第 1 盃状穴を発見して以来、次々と謎穴が見つかっている。その調査成果もさることながら感じることは、私たちの暮らしの変化の速さである。というのは、基礎資料として平成 20～21 年の悉皆調査写真を持参して調査をするのだが、往々にして場所の移動がみられることである。江戸時代から今日まで残されてきた石造物が、ほんの 15 年くらいで開発等により現代人の都合で移動を余儀なくされるのである。石造物には、そこにあることの意味があるのだが、これらを引き継げる地盤が徐々に減っているように思う。それでも地域の方々によって守り伝えられてきた文化財に、当時はここにあったという記録があると納得のいく場所に存在していたことがわかる。民間信仰の一種である石造物は物を言わないが、その立ち位置に当時の人々の想いや暮らしをみるができる。この灯籠はここで道行く人の安全を守り、見送ってきたのかな、ではその灯籠の基壇に開けられた穴はどういう意味を込めたものだったのだろうか。子供の遊び相手もしたのだろうか、そんな古代の人に思いを馳せることができるのがこの調査の魅力のひとつであり、急激に変わる時代を記録する使命も帯びている。ちょっと出かけた先で見かけた街道沿いの神社や辻で石造物を中心に覗いてみれば、誰でもできるこの調査にぜひ情報を寄せてもらえればと思う。

相模原市総務課市史編さん室 2009 『旧相模原地域 20 年度石造物・景観調査報告書』

相模原市総務課市史編さん室 2010 『旧相模原地域 21 年度石造物・景観調査報告書』

相模原市教育委員会 1990 『さがみはらの地名』

表 1 石造物別盃状穴数および部位・年代表

名称	位置	石造物の数	盃状穴の数	部位	年代	名称	位置	石造物の数	盃状穴の数	部位	年代
庚申塔 (12)	⑤、⑧、⑫	12基	15個	頂部、基壇	明治5 (1872) 年	時宗六字名号碑 (1)	磯部2555	1基	2個	基壇	江戸時代
道祖神 (3)	④、⑫、⑮	3基	18個	頂部、基壇	弘化3 (1846) 年 文久4 (1864) 年	馬頭観音 (1)	⑮	1基	1個	頂部	不明
地藏菩薩 (1)	⑪	1基	6個	蓮弁前側	不明	不明石造物 (2)	⑮	2基	6個	表面	不明



図1 府中通り大山道ルート調査①



写真1 新磯地区①の盃状穴調査 道祖神③地点



写真2 大山を望む辻道沿いの道祖神に盃状穴を発見④地点



写真3 相模原盃状穴調査隊の第1盃状穴発見記念



写真4 道祖神に作られた盃状穴



図2 府中通り大山道ルート調査②



写真5 大山道沿いの新磯地区②盃状穴調査⑫地点



写真6 道祖神の頂部に作られた盃状穴⑬地点



写真7 四ッ谷橋西側庚申塔と馬頭観音石造物群⑱地点



写真8 青面金剛像㉑地点の基壇に開けられた盃状穴



写真9 秋祭り準備風景①



写真10 秋祭り準備風景②



写真11 秋祭り準備風景③

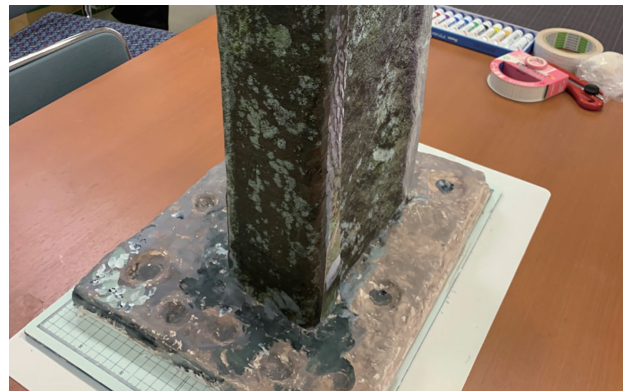


写真12 盃状穴の模型を作成



写真13 秋まつり盃状穴調査隊展示ブース



写真14 レンガで盃状穴作りワークショップ



写真15 下九沢の盃状穴調査 (手水鉢に盃状穴)



写真16 田名の盃状穴調査 (手水鉢に盃状穴)